

作品発表

「マーブル染めによる制作」

Works Using the Marble Dying Technique

戸坂 恵美子

(北翔大学北方圏学術情報センター研究員)

北翔大学短期大学部名誉教授

制作記録より

テキスタイルには、織物・染色・編み物等、様々な種類があります。更にそのひとつひとつが非常に多くの種類や特質をもっています。私がライフワークとする染色も実に幅が広く、奥の深い世界です。

例えば技法で言えば、日本の伝統工芸でもある型染めを始め、絞り染め、ロウ染め、捺染、ブロックプリント等々、数多くあります。

又、染料についても天然染料から化学染料に至るまで、実に多くの種類があります。これらは太古の昔から約1000年位は動植物を原料とし、さらに鉱物による媒染剤の働きによって各種の色が生み出されて来ました。

やがて19世紀中ごろに合成染料が発見されました。このことはテキスタイルに於いて革命とも言えるものでした。以来多くの研究者により化学染料が開発され、現代ではアイゾック染料、分散染料、塩基性染料、媒染染料、顔料、バット染料、硫化染料、直接染料、酸性染料、反応性染料等優れたものがあります。

素材についても絹、木綿、ウールの他、紙や皮、化学繊維等があり複雑です。

この様に多彩な選択肢のある中で私が最も重要だと考えるのは、制作に当たってのイデオロギーであり、それはテキスタイルデザインであっても、テキスタイルアートの領域であっても、その土台となるデザイン、或は下絵によって、最も的確なものを選択し組み合わせることが必要ということです。

私は大学では主として型染めや絞り染め等を習得しましたが、その後染色の技法の中でも最も絵画に近い結果を表現出来るロウ染めを学びました。短大で学生に指導する立場から自分自身も色々な技法をマスターして学生が興味を抱いてくれる様に心がけて来ました。

このことは私自身の制作にも大きく影響しています。制作を始める前には、その時々イメージによって下絵を作り、技法を選び、布地を選びます。例えば絵本を製作する時は、絵画に近いロウ染めを選び、又ここ数年続けているテーマ「風と光の中に…」を制作する時には揺れ動く様々な事柄を染色技術の持つ偶然の力も借りて予

測の出来ない不思議な現象を表現したいと思うためマーブル染めの技法を選ぶと言う様に非常に柔軟性を持って作業を進めております。

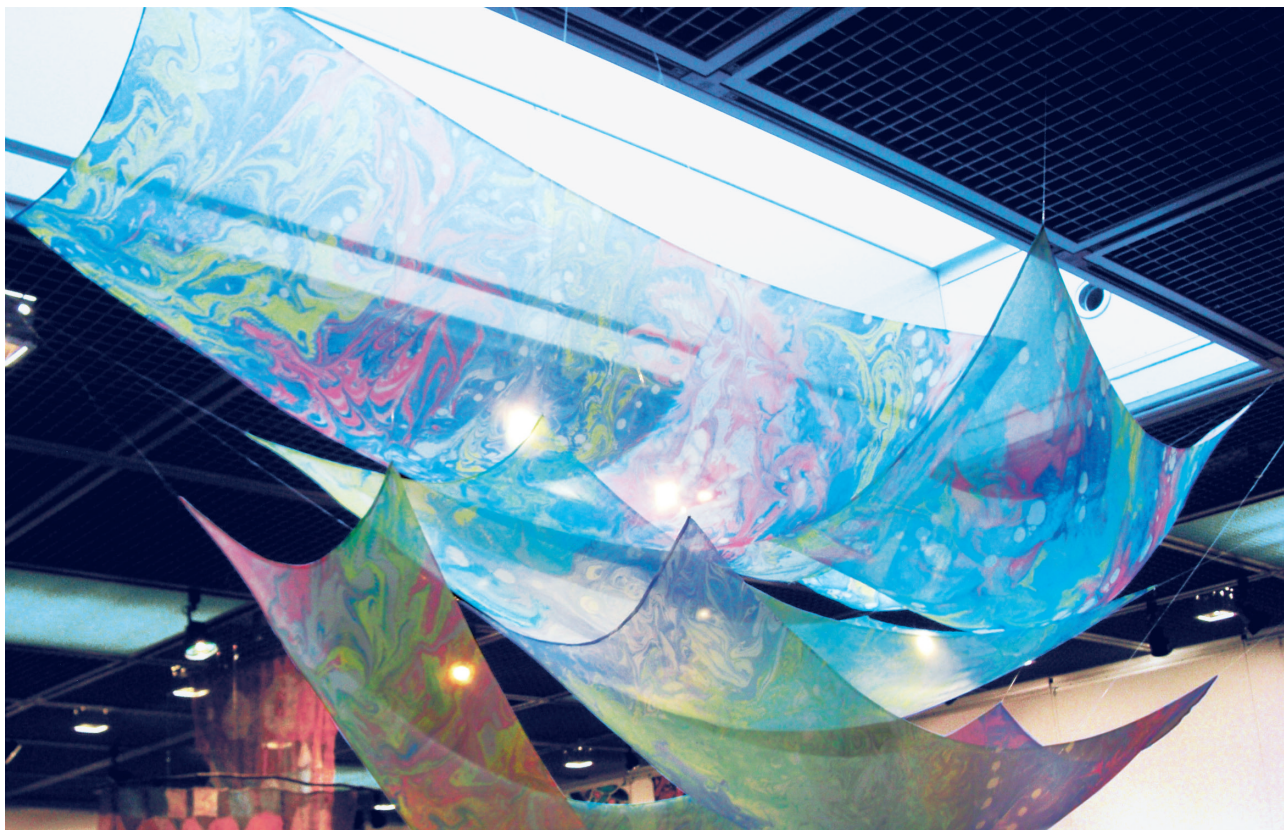
元々、このマーブル染めは、ヨーロッパで紙に施された模様から発展したものです。建築物に多く使われている大理石の模様に類似していることからマーブル模様と呼ばれる様になりました。マーブル模様の紙は箱に貼ったり、本のカバーになったりと、日常生活に使われる小物類を飾って人々に喜ばれております。それが、近年は布に施すことに関心が持たれるようになり、いろいろと工夫される様になりました。

私もおよそ20年位前にフランクフルトの国際ブックメッセで、紙にマーブル模様を施しているイタリア人の実演を見て大変興味を持ち、布に用いたいと思っておりました。

いろいろ試みましたがなかなか思う様にいかないでおります中に、日本でも新しい材料が工夫され、手に入るようになり、布に色素を定着させることが可能になりました。

ただ現在、私はイメージのために出来るだけ薄い布を使用して制作していますので、濃色を定着させることに非常に難しさを感じています。下準備には長い時間がかかりますが、実際に染色するのは瞬間の勝負でもあります。非常に神経を使う仕事ですが、時には思いがけなく神秘的とも言える偶然性に出合っ心躍る時もあり、面白く、やり甲斐を覚えます。

しかし、まだまだ研究の余地があり、未知の世界への挑戦は今後も続くことでしょう。



セレナーデ シルク 220cm×90cm 5枚 2010.
第26回北海道テキスタイル協会展に出品



光華 シルク 19cm×19cm



光華 シルク 19cm×19cm

シルクロードの子供達の絵とテキスタイルミニチュール展に出品
2009.



クリスマスリース シルク 直径60cm 2010.
北海道デザイン協議会デザインフェスタに出品